限界への挑戦

理論上「富士山が見える」と言われた花塚山は
富士山から308キロの距離。
北限の富士山撮影に挑む男たちを突き動かしたものは
郷土愛とプライド、そして深い友情だった。
もはやこれは男のロマン。
無謀と言われた挑戦の先に真実はあった。

きっかけは7年前の新聞

3人が花塚山からの富士山撮影に挑戦するきっかけになったのは、平成22年1月6日に発行された新聞のある記事だった。

それは、富士山の見える北限は、理論上は花塚山だが、誰も撮影に成功したことはないというものだった。

登山仲間であった菅野さんと斎藤さんは、「自分のふるさとが、もし、富士山の見える北限の町になったら、たくさんの人が川俣町に訪れ、町の素晴らしさを知ってもらうきっかけになるのではないか」。そう考え、期

写真：挑戦者3人で撮影。左から大槻功さん、菅野和弘さん、斎藤金男さん（花塚山・花塚台、平成29年1月15日）

待に高鳴る胸の鼓動を抑え、すぐさま雪化粧の花塚山へと足を運んだ。

菅野さんは平成21年12月に、それまでの北限とされていた麓山（二本松市・富士山から298㎞）から、明瞭な富士山の撮影に成功していた。

そのため、麓山から10㎞離れた花塚山からの撮影も、気象条件にさえ恵まれれば、実現可能なのではないかという気持ちを抱いていた。

しかし、撮影のチャンスは11月から1月までの限られた期間。川俣町、そして、富士山周辺の天候を入念に調べながら挑戦を続けたが、富士山はなかなかその姿を現さなかった。

2年目の挑戦となった平成23年1月には、2人の挑戦がテレビで放映され、それを見ていた大槻さんも「北限からの富士山を見てみたい」という一心で、この挑戦に加わった。

深い葛藤 そして決断

▲厳しい雪山での挑戦は続いた。

そんな中、平成23年3月11日の東日本大震災、そして、原発事故は3人の挑戦にも黒い影を落とした。

「この状況で挑戦を続けてもいいのか」「撮影できたとしても、花塚山に負のイメージがついてしまうのではないか」。3人の胸中は複雑だった。

しかし、3人の心の中から、真っ白に浮かぶ富士山の姿が消えることは無かった。「暗い話ばかりしていても未来は見えない。挑戦を続けることが前を向くことの第一歩」と、線量計を手にした挑戦が決まった。

すると、平成23年11月、大槻さんが稜線の先にうっすらと富士山のような影が写った写真を撮影した。

この写真を見た菅野さんと斎藤さんは、「まさに、これが富士山では！」と発表を勧めたが、大槻さんは「もっと鮮明な富士山が撮れるはず」と発表を見送った。その後、平成25年1月に菅野さんが撮影した画像も鮮明でなかったため、発表が見送られた。

その後も、平成26、27年と挑戦は続いたが、条件に恵まれず、登れど登れど富士山の姿をとらえることはできなかった。「花塚山からの富士山撮影がこんなに難しいなんて…」。3人は挑戦の難しさを痛感していた。

そして、男の意地で続けてきた挑戦も7年目となった平成28年11月26日。この日はこれまでになく山々の稜線が鮮明に見えていた。「もしかしたら今日こそは…」。下山後に確認した菅野さんと斎藤さんの写真には、うっすらと、でも紛れもなく富士山の姿が映し出されていたのだった。

菅野 和弘さん（大綱木・58歳）

花塚山からの富士山撮影に挑戦を始めたきっかけは、田代先生が、平成22年1月6日に富士山の見える北限の可能性について書いた新聞記事でした。平成21年9月に健康のために登山を始め、その年の12月には、それまで北限と言われていた麓山からの富士山撮影に、運良く成功しました。「北限からの撮影に成功した！」と思っていたのに、新聞記事には、更に北限がある、しかもそれが地元の花塚山だと書いてありました。「川俣町を富士山の見える町にできるかもしれない」という思いで、早速、平成22年1月16日に山仲間に案内してもらい、花塚山からの撮影に初挑戦しました。麓山からの富士山が、すんなり撮影できたこともあり、たった10キロしか離れていない花塚山からの撮影もすぐに達成できるのではと考えていました。しかし、現実は甘くなく、その後もなかなか富士山の姿をとらえることはできませんでした。挑戦の最中には、あの原発事故もあり、悩むこともありましたが、仲間に支えられながら挑戦を続け、今回、なんとか富士山の姿をとらえることができました。自分としては、納得できる富士山の姿ではないのですが、これまで7年間、計59回の花塚山登山のご褒美として、川俣町を富士山の見える北限の町にできたことが、今は何より嬉しいです。

▲平成25年1月5日に菅野さんが花塚山から撮影した富士山